

フィッシュボーン・スープ

一晩寝れば快癒すると踏んでいたのだが、結局、アバラの痛みは治らなかった。しかしそれは、決して心地の悪い痛みではなかった。ただ、言い知れない哀しさがそこにあった。大気を漂っていた何か質感をともしなわないものが、私の中に降りて来てそのまま居座ったようだった。私はインスタントコーヒーにつめたい息を吹きかけて冷ましなが、少し伸びすぎた爪の先を眺めている。窓の外は青空が広がっているが、この部屋の中は不思議と薄暗い。

台所では、私の姉が魚を焼いている。小ぶりのアジを二匹フライパンの上に乗せて、オリーブオイルとレモンで香りをつけて、鼻歌を歌いながら。なんて平和な光景なのだろう。なんて心落ち着く風景なのだろう。しかし釈然としないのは、私には姉などいないという、動かしようのない事実である。

そう、私には姉はいない。その代わり、兄がいる。パリの街で、五羽の鶏といつしよに暮らしている兄。

目をつぶれば 兄の生活ぶりが頭の中に浮かんでくる。風が吹けば倒壊してしまいそうなぼろアパートの一室。鶏たちは毎日新鮮なたまごを産む。朝の光が、たまごの殻の曲線をなぞってゆく。兄はそれを拾い集めて、ベッドの上に積み上げる。そして、煙草に火をつける。煙が目にして、彼は顔をしかめてみせる。兄はたまごの殻に埋もれて眠るのだ。山とつもったたまごの殻は、まるで割れた石膏像の破片のよう。

私は目を開き、ため息をつく。私も彼を真似て戯れに喫煙でもしてみようか、とも思う。

まだ私が小学校低学年の頃のこと、夏休みのある日に、兄が動物園に連れて行ってくれたことがある。

今では、その思い出の輪郭はぼやけきつてしまっている。しかし、六本足の羚羊の檻の前に立っていた時の記憶だけは、いまだに鮮明に思い出すことができる。白い太陽光線が地表を覆い尽くしている、真夏のある日のことだった。

私は左手でソフトクリームをしつかり握り締め、右手で麦藁帽子に付いているリボンを絶えず触っていた。兄は真っ白なシャツを着ていて、太陽の光がその白色に反射して眩しかった

六本足の羚羊は二頭いて——おそらく親子だろう、と私は思っていた——薄暗い檻の片隅で、静かに身を寄せ合っていた。六本足の羚羊の目は夏の晴れ渡った空のように澄み切っていて、形容しがたいものがなしさを湛えていた。

兄の白いシャツと、六本足の羚羊の角と、夏の日差しが眩かった。忘れられない。

……というように出を私は抱いているのだが、それについて語るたびに私は周囲

の人々から冷笑されるのである。彼ら曰く、「六本足の羚羊は架空の動物よ。動物園なんかにいるわけじゃないじゃない」そして彼らは、きっと私が何か他の動物を六本足の羚羊だと勘違いしたか、もしくは夢で見た情景を実際の思い出と勘違いして記憶しているのだ、と結論づけるのであった。しかし事実私は、大人になった今日に至るまで、繁華街のスクランブル交差点、喫茶店の窓の外、夕ぐれのを空をバックに聳え立つ高架橋の上、私が暮らす家の庭などで、六本足の羚羊がゆつくりと歩いてゆく姿を見かけたことだってあるのだ。

しかし、いくら私が六本足の羚羊の実在を力説しても、親も友人も、それどころか、いっしょに六本足の羚羊を見て、六本足の羚羊について話をしてくれたはずの兄すらもが、私の演説をたわいもない笑い話として片付けてしまうのだった。

兄は時々、思い出したように絵葉書を送ってくる。絵葉書の裏面には、古めかしい格好をした貴族の女性の肖像画が描かれている。私は彼女の何を一つ知らない。ひだの多い花柄のドレスに身をつつんだ、決して美しいとは思えない中年女性。落ち窪んだ目、鶏がらのような手足、何の弾力もなさそうな肌、そしてそれを覆い隠さんとして過剰に施された悪趣味な化粧。おまけに、エスカルゴを模した珍妙な帽子を被っている。彼女の顔に刻まれた皺を見ると、滑稽な、その一方で悲しいような気分になる。とは言え彼女には奇妙な威厳があり、気の弱い私などは思わず気圧されてしまう。そう、彼女は実に威厳のある女性だ。実に。

※

というわけで私には兄はいるのだが、姉などいない。それなのに、台所からは彼女の鼻歌と、魚の油がフライパンの上で撥ねる音が響いてくる。「アバラ、まだ痛いのか？」姉はそう私に呼びかける。「ちよつとだけ痛い」と私は答える。

「やっぱり、手術の影響がまだ残ってるのか？」姉は憂いを帯びた声でそう尋ねてくる。少し低めの、透明感のある声だ。「ううん、わからない。」と私は答える。

私はカーテンを少し開けて、表を見てみる。抜けるような青空なのだけど、遙か彼方には入道雲が見える。もくもくと立ち上った、不気味な入道雲。

そして私は、ある詩人が「入道雲は、汚水を含んだ川のおぼくみたいで嫌いだ」と詠っていたことを思い出す。私はカーテンをしめる。

※

たんたん料理を続ける姉は、部屋の隅のCDコンポからこぼれ出している音楽——エリック・サティのピアノ曲——に合わせて鼻歌を歌っている。

そのCDは、ダニエルが私の誕生祝にくれたものだ。

ダニエルは私の友人で、同じ劇団に所属している。彼はアルビノ特有の真っ白い髪の毛に、緑色のペンキで縞模様をつけているのが塗り上げているのがトレードマークだ。

ダニエルは役者なのだけれど、演技よりも書き割りにペンキを塗る方が得意なので、もっぱら

大道具係として活躍している。でも、ダニエルはそのことに不満のご様子。「まったく、ぼくは舞台に立つために劇団に入ったのに」ダニエルはそうこぼしながら、毎日から晩までせっせとペンキを塗っている。そんなダニエルの愚痴を耳にするたび、私たち劇団員は顔を見合わせ、プツと噴出す。なぜなら、ダニエルの演技は大根もいいところ。それに、大のあがり症。泣かせるセリフで客を笑わせ、笑わせるセリフで客を冷めさせ、棒杭みたいに立ち往生。困ったものだと座長も苦笑いしている。

ダニエルは謎に包まれた人物だ。頼るあてもないままに日本にやって来て、渋谷駅前の一角（よく、街宣車に乗った右翼の活動家が演説をしている場所）でデタラメな歌を歌っていた。アボガドに頭つつこんで、三人の御者は大慌て。オー、花壇の花がみんな萎れた、こいつはのジャック作業だぞ。ジャックつかまえて縛り首、ジャックの母さんろくろ首。と言った具合。

そう、彼は堂々とした態度で歌を披露していた。ギターを爪弾くことも無く、アカペラで。まったく意味のない単語同士を嬉々として連結させて。誰も足を止めないというのに、一日中。もともと声帯が頑強ではなかった彼は、すっかり喉をつぶしてしまった。それでも、彼は情けないしやがれ声で歌い続けた。

劇団に入ってから、彼は暇さえあれば意味不明なフレーズをハミングしている。着ている服を極彩色のペンキでべたべたにしながら、彼は自分の世界にもぐりこんでしまう。そうになると、もう手のつけようもない。たまに、傍を通りかかった人に、何の意味もなくバケツ一杯のペンキを浴びせかけたりもする（私も以前やられたことがある。おろしたてのTシャツが、一瞬で台無しになってしまった）。困ったものだ、と座長も苦笑いしている。

でも私は、そんなダニエルが大好きだ。

※

ダニエルの恋人のキヌコ——うちの劇団に欠かせない名女優——は、私の大の親友だ。腰まで垂らした長い髪の毛の右半分は美しい黒髪で、左半分は目の覚めるような赤毛。光り輝くエナメルスーツに身を包み、食べるとハイになるクッキーを常備している（彼女曰く、そのクッキーはかのウィリアム・バロウズが『裸のランチ』を執筆した時に好んで食べていたものだそうだ）。そして面白いことに、スコットランドに行った事もないのに、英語をしゃべるとなぜかスコットランド訛りになる。英国人のダニエルですら、「キヌコの訛りは完璧だ」と絶賛する始末。

キヌコはクッキーの力も手伝っているのか、いつも明るく愉快に振舞っていて、時にそのテンションの高さが回りにいる私たちを疲れさせたりもする。一度など、夜通しクッキーとウイスキーを摂取し続けたせいでタガがはずれ、傍に居合わせたダニエルをものすごい力でねじ伏せると、電気剃刀と裁ちばさみを使って彼の頭をスキンヘッドにしてしまった。翌朝素面に戻った時、キヌコは呆然と横たわっている坊主頭のダニエルを前にして、こらえ切れずにそこら中を笑い転げながら必死で謝り続けたのであった。

一見何の悩みも抱えていないように見えるお気楽なキヌコだが、実は彼女はナルコレプシーに

悩まされている。高校の時以来の持病だそう。そのため、彼女は本当にいい役者なのだけれども、稽古をしている時はもとより、あろうことか本番の舞台の上ですら眠り込んでしまうことがある。長いセリフの途中でふっと黙り込むと、まるで棒杭のように「ばたん」と床に倒れこんでしまうのだ。黒髪と赤毛が空気を孕んで舞い踊り、横たわる彼女の真っ白い横顔を覆い尽くす。あんなに耽美的な光景を、私は他に見たことがない。

しかし笑い事で済まされないこともある。入浴中にナルコレプシーの発作が起こった時は本当に危なかったそう。たまたまその時はダニエルが一緒だったから間一髪で助かったものの、下手すれば確実に彼女は浴槽の中でその生涯を終えてしまっていたことだろう。

気持ちのよい秋のある日、ダニエルがキヌコのアパートに遊びに来た。キヌコはダニエルといっしょにリビングのソファに座り、白ワインを飲みながらぼんやりとテレビを観賞した後、シャワーを浴びて来ると言って席をたった。ひとり部屋に残ったダニエルは、この後練り広げられる予定の快楽的な遊戯の模様を *imagen* して胸ときめかせつつ、白ワインを飲み続けていた。しかし彼女がいつまでたっても戻ってこないの、段々と不安に駆られるようになった。ついに腰を上げて風呂場に向かった彼が目にしたものは、二色に色分けされた豊かな髪の毛を水の中に躍らせてうつ伏せに沈んでいるキヌコの姿だった。

ダニエルの迅速な対応で、キヌコは一命を取り留めた。しかし彼女はなんとなくその事を不満に思っているようでもあった。

※

一度、キヌコとダニエルと私でピクニックに行ったことがある。

私は二人に誘われた時、「お邪魔虫になるからやめとくよ」と言ったのだけれど、二人は笑って「そんな気を使うことないよ」と取り合わない。

「丁丘に登ろう。あそこはなにしろ、空気がいいからね。肺を洗濯するにはもってこいの場所だよ」ダニエルは爪を磨きながらそう提案した。

「そう、丁丘はいいわね。あそこは太陽の色が特別キレイに見える場所だものね。太陽光線を浴びながらお茶を飲むと格別よ」キヌコは、赤と黒に別れた髪を梳かしながらそう言った。こうして私たちは丁丘に行くことになった。

ダニエルが車の運転をし、キヌコが得意のニワトリ料理と紅茶を用意し、私がサンドウィッチを作ってくることになった。私は当日の朝四時に起き、サンドウィッチ作りに取り掛かった。私は小食なのだけれども、ダニエルとキヌコは相当な大食漢だ（それなのに二人とも、あんなに痩せているのが不思議）。いっぱい作って行かなければ！

私は大量の食パンをスライスし、台所にある中で一番巨大な鍋でたくさんのお卵を茹で、冷蔵庫いっぱいを買っておいした胡瓜を切り刻んだ。たちまちにして台所は、薄切りにされたパンと胡瓜の山に占拠されてしまった。

私は巨大な鍋からすくい上げた固ゆで卵を、これまた巨大なボウルに移し、マヨネーズをたっぷり混ぜながら力任せにすりつぶした。すりつぶしながら、私は戯れに歌を歌った。こうして歌っているうちに、凍っているバターも溶けてパンに塗りやすくなることだろう、私はそう思っ

た。

タマゴ、タマゴ

コロンプスの卵

地球は回る、くるくる回る

タマゴ、タマゴ

コロンプスの卵

タマゴの中で、地球は回る

表がぼんやりと明るくなってくる頃に、仕事は完了した。私の眼前に置かれた、大きなバスケット三つにギッシリ詰まったサンド・ウィッチ。素敵な朝だ、と私は呟いた。

※

ダニエルのバンに乗り込んだ私たちは、市街地を出てから高速を二時間ほど走ってT丘に到着した。私はてっきり歩いて丘を登るものと考えていたので登山靴を履いてきたのだが、ダニエルは頂上まで車で一気に駆け上がったしまった。「僕は文明人なもので、歩くのが苦手なんだ」とダニエルは言う。「単なる体力不足でしょう」とキヌコがすかさず応酬する。

T丘の頂上は、ダニエルが言っていた通りの素晴らしく綺麗な空気と、キヌコがいつていた通りの素晴らしく綺麗な太陽の光で満ち溢れていた。踏みしめると足の下で草が擦れ、青くさくも心地よい香りがたちのぼってくる。連なった巨大な山々が、私たちの眼前にどこまでも続いている、その輪郭と空とが溶け合い混ざり合っているように見えた。漂う雲は靄となって四散し、その向こうには青空が鮮やかに広がっていた。丘の麓には小さな集落があり、そのちっぽけな佇まいはジオラマや箱庭以上にジオラマや箱庭のようだった。ああ、なんとちっぽけな人々の営みなのであろうか。こんなに大きな空の下で、今更何をやろうとしているのだろうか。

私たちは露に濡れた丘の斜面に無造作に座り込み、バスケットの中身を広げた。楽しい茶会の時間の始まり。

サンド・ウィッチはなかなか好評で、私はほっと胸をなでおろした。しかしなんと言っても、キヌコのニワトリ料理が絶品だった。キヌコは慣れた手つきでナイフをくるくると回し、ブラウンライスの詰め物をタップリと孕んだ肥満体のチキンを切り分けてくれた。この間オープンをしたのよ、と彼女は嬉しそうに言った。そのせいか、前よりもうまく焼けるようになったと思うわ。今度は七面鳥の丸焼きを作ってあげるからね。七面鳥が入るなんて、ずいぶん大きなオープンね！私は歓声を上げた。

返す手でキヌコは、紅茶の入った水筒を取り出した。ここへ登った時は、必ず頂上でこのお茶を飲むことにしてるの。なるほど素晴らしく美味しい紅茶だった。何か変わった成分でも入っているのか、体が軽くなったような、それでいて重くなったような、まるで自分の全てが自分を離

れてしまうような、そんな感覚に襲われた。このお茶といっしょに、これ（と言って、キヌコは常時齧っているクッキーを差し出した）食べてご覧。ぶっ飛ぶから。言われるがままに私はクッキーを受け取って、口に放り込む。奥歯の上で砕けるクッキー、そこに温かい紅茶を流し込む。すると途端に、晴れ渡った夏の青空がぐるぐると歪んで回転し始める。確かにこれはすごいや、と私は思った。私が作ったサンド・ウィッチが空中に舞い上がり、風船に変身した。それを見てダニエルは笑い転げ、斜面をころころと転がりながらカメラのシャッターを押し回っている。「一体何を撮ってるの、ダニエル？」「決まってるじゃないか。太陽の真横に巨大なスモモが浮かんでるだろ。あれを撮ってるのさ」「あなた本当にバカね！」キヌコは肩をすくめる。「あれはスモモじゃなくてバナナよ！」そうなのだろうか。私には苺に見えたのだけれど……。

風船になったサンド・ウィッチはしばらく雲の間を浮遊していたが、やがてお互いにくっつき合い、溶け合い混ざり合いしだした。そのうち、その風船の集合体は二体の巨人を形成し始めた。輪郭がはっきりと見えてくる頃には、私は二体の巨人が布団職人であることに気づき始めていた。その上、彼らが布団の製造方法をめぐって根深い対立をしているらしいことも、なんとなくではあるが推測できた。彼らはお互いを痛罵し合い、両手一杯の羽毛を投げつけ合った。たちまち、そこら中の山の上に雪のような羽毛が降り注いだ。真夏に降る雪には、なぜこんなに心がときめくのだろう。私は思わず頭の上に降って来た雪（羽毛）に手を差し伸べたが、それはあと数ミリで触れられるところでふっと消えてしまうのだった。

そう、消えてしまうのだ。大量の羽毛が吹雪のように激しく舞い踊っていたが、それらは私たちに触れることなく、次々と大気に拡散していくのだった。ダニエルとキヌコはその光景を見て、頬を寄せ合い無邪気に笑い合っていた（ひよつとすると、彼らは彼らで別の何かを見ていたのかもしれないが）。

※

やがて羽毛が一つ残らず消えてしまい、二人の巨人も何処かへ姿を消してしまうと、私たちは強烈な倦怠感に襲われた。ダニエルとキヌコと私は丘の斜面に川の字になって寝転がり、空を見ている。青い空を背に、白い雲が信じられないほどゆっくりとしたスピードで流れていた。

「疲れたね」キヌコが言った。

「うん」ダニエルが答える。

『「死んだふり」でもする？』とキヌコ。

「ああ、そうするか」ダニエルは大きく頷いた。

「貴女もする？」

「ええ、やってみる」と私。

「それじゃ久しぶりに、『死んだふり』でもしますか」

そこで私たちはめいめい思い思いの場所に身を横たえ、『死んだふり』をし始めた。ダニエルは不自然に体の間接を曲げ、キヌコは白目を剥いて髪の毛を振り乱した。不器用な私はなかなか二人のようにうまくはやれなかったけれど、それでも懸命に死体の気分になろうと努めていた。

それからどれぐらい時間が流れたことだろう。抜けるような夏空の下で、私はいつしか死んだ

ふりに没頭していた。自分がもうすでに死んでいるのだと仮定することは、何ともいえない寂寥感と陶酔感の狭間を漂っているようで心地よかった。ひよっとすると、私は今本当に死んでいるのかもしれない。あるいは、私はすでにとうの昔に死んでしまっていたのかもしれない。ぽっかりと浮かんだ所在ない虚無の中で、私は静か過ぎるほどに静かな「死」に包まれていた。まだ私が胎児だった時も、こんな風にして羊水の中を漂っていたのかしら。あんまり夏の空がきれいだったので、そんな風に感じるのだろうと思った。

ふと、首筋に温かい息を感じた。キヌコかしらと思つてそつと薄目を開けて見てみると、そこにいたのはキヌコではなく、一頭の六本足の羚羊が私の顔を覗き込んでいた。

そのまましばらく、私たちは互いの瞳の奥を見つめあつて過ごした。それが数分間だったのか数時間だったのか数日間だったのか、或いはそのような尺度では測れない時間だったのか、今となつてはわからない。やがて六本足の羚羊は私の元から立ち去り、六本の足をたくみにうごめかせながら、目にも止まらぬような速さで丘を駆け下りて行った。

※

いつの間にか私はまどろんでいたようだ。目覚めてすぐにカーテンを開けてみると、さつき遙か彼方に見えていた入道雲はすっかり拡散して消え去っていた。

「お待たせ。できたよ」

姉は磯の香りを漂わせながら、二つのマグカップと二枚の皿をいっぺんに持つてやつて来る。

二匹の焼き魚は、きれいに骨抜きをされていた。しかも、まったく身を崩すことなく。

「抜いた骨を使って、スープを作ったの。」

湯気立つマグカップを私の目の前に置いて、姉は優しく微笑んだ。なみなみと注がれたスープの底に、魚の骨が踊っている。なんだか哀しいぐらいに懐かしい気分になった。姉の瞳孔の奥には、抜けるような夏空。なんて懐かしい空の色なんだろう、私はそう思った。

「じゃあ、いただきますか」

私はスープを一口、口に含む。懐かしい味がする。エリック・サティの音楽が流れてくる。窓の外は抜けるような夏空。ああ、なんて素敵な午後なのだろう。

(二〇〇七年八月三十日)